

言葉の重みを考える

「キモイ」「うざい」「死ぬ」

■北海道滝川市の小学6年生女児が「5年生になって人から『キモイ』と言われてとてもつらくなりました。6年生になって差別されるようになりました」という遺書を残し、自らの命を絶ちました。

■福岡県筑前町の中学2年生男子生徒が、同級生からあだ名でからかわれ、「うざい」「きもい」「うそつき」などの言葉を投げつけられるなどのいじめを苦に自殺しました。

この問題で、筑前町教育委員会が設置した調査委員会は、「からかいや冷やかしの言葉が、結果として男子生徒を死に追い込んだ可能性がある」と報告しています。

■北九州市の高校1年生女子生徒が「ブログに『死ぬ』と書き込みされた」などとする遺書を残し、自宅で自らの命を絶ちました。

これらに見られるように、全国で発生しているいじめ苦による自殺問題では、言葉が尊い命を奪う鋭い刃となっている例が珍しくありません。

熊本県では、県北の高校教師による部落差別発言や、県南の中学生による水俣病差別発言の問題が起きています。これらも言葉によるものです。

「大丈夫？」

どうしたん？」

県人権作文集に掲載された中学2年生女子生徒の作文の一節を紹介します。

「ある日、また仲間はずれにされ、私は一人で泣いていた。みんなは楽しそうに外で遊んでいた。すると、ある一人の友達が私の隣に座り、私の顔をのぞき込むようにして優しく『大丈夫？ どうしたん？』と声をかけてくれた。私はそんな言葉をかけられたのはすごく久しぶりで、すごくびびくりしたが、『ううん、何でもない』と答えた。でもその一言で私の心の中は温かくなつた。友達の一言は今でも忘れない。『大丈夫？ どうしたん？』その一言で救われたからだ。」

言葉の重みと力

私たちが発する言葉は、場合によっては人の命までも奪う強い力を持ちます。反対に、さりげない一言が、人を励まし勇気づけたりもします。

言葉は、さまざまな人間の価値観によって多様に遣われますが、互いの理解を深め、豊かな人間関係を築くためのコミュニケーションの基本となるものです。私たちは、言葉の背景にある「心」にも焦点を当てながら、言葉の重みを、もっと深く考えていく必要があります。

益城町教育委員会

ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名

362

飯田山常楽寺^②

今後は飯田山と常楽寺に関わりのある人物を取り上げます。

最初は、常楽寺創立者としての日羅伝説です。日羅伝説は常楽寺幹縁文にも語られています。昭和11年6月に出版された「日羅公傳」(矢野盛経著)その他各種の伝記・資料類から要点のみを抜粋略記しています。

6世紀の倭人系百済の官吏と火葦北国造刑部鞞部阿利斯登の子。もともと日本人であり、大伴大連金村により父阿利斯登が百済に派遣され、百済で生まれた子の日羅はその才により達率(たちそち。百済官位十六階の第二位)の官位を与えられ百済王に仕えました。敏達12年(583年)任那再興を志す敏達天皇は再建策を問うため重臣2人を派遣して日羅を召しましたが、百済王がその才を惜しみ日本への帰国を許さず、そこで天皇は再度重臣を派遣したため、百済王は仕方なく副使として百済の家臣達を随行させて帰国を許しました。敏達12年(5

83年)10月日羅は47年振りに帰国しますが、この時すでに80有余歳と伝えられます。しかし百済の高官である日羅から百済の最高機密が日本に漏れるのを怖れた随行の百済の家臣は日羅の暗殺を計画し、日夜隙を狙いますが、体から発する後光を恐れて実行できず、その年の12月大晦日の日だけ後光が消えたので暗殺を実行したとされます。日羅来日から僅か100日足らずでした。

しかし実際は日羅は仏僧ではなく百済の政治家であり、時には数万の軍勢の指揮官でもあったのです。その意味で敏達天皇は当時の緊迫した国際情勢に対処するための情報を得る必要から日羅の帰国を命じたのです。

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



日羅公伝の表紙